

藤原良章編

『中世人の軌跡を歩く』

高志書院 二〇一四・三刊

A5 四〇〇頁 八〇〇〇円

「本書は中世に生きた人々の諸側面を、歴史学・考古学、あるいは文学の立場などから考察してみたものである」と、書籍の冒頭で編者はこのように紹介する。編者の還暦を記念した論集は、三部十七本の論文で編まれ、編者の中世史研究に対する視線を如実に示している。発起人の中澤克昭は「武士・境界・都市・ムラ・交通・職能・家業など多彩で、史料や方法も、古記録・古文書・絵図・絵巻物・軍記・今様・説話・板碑・土器・現地調査と多様である。」と「あとがき」に述懐する。本書の立場はこれらの言に尽くされる。それだけに内容は懐が広く、評者の力量では全体を評するには遠く及ばない。この書評では分量もあることから、三点ばかりの感想を述べ、その責を塞ぎたい。

まず中世成立期の所論が一群をなしている点が注目される。真鍋淳哉「三浦氏と京都政界」・植木朝子『梁塵秘抄』の職人たち・豎月基「中世前期貴族層における父子関係覚書」が所載される。また藤原良章『後三年合戦絵詞』の世界・八重樫忠郎「平泉と鎌倉の手づくねかわらけ」・岡陽一郎「境界と貴人」・鈴木弘太「骨寺村と中尊寺を繋ぐ道」は奥州藤原氏に関わる論考であり、一書としての特性を放っている。史料の多様性および程よい事例や量

を踏まえると、当該期とりわけ平泉を中心とした研究は、学融合の先端的な研究土壌になっていることが浮かび上がる。そのなかでも八重樫の技法の受容と変化の論点は、当該期を考える上での新たな視点を提供する。

第2部では藤本頼人「別所」地名と水陸のみち・鈴木沙織「下総東部における水上交通」・田中信司「武蔵国北辺の戦国期交通網について」・鈴木弘太前掲・福原圭一「直江状」と上杉景勝政権のインフラ整備」など、交通に関する論考が編まれる。編者ならではの部立てであろう。様々な方法論によって語られる交通論は、主として権力者の交通計画の実現を捉えていた。そして計画の実現を見つつも、田中は鎌倉街道中道の不通を指摘する。中世交通路の限界を踏まえての考察は重要な視点である。

好論はさらに続く。落合義明「中世武蔵武士の成立」・黒嶋敏「鎌倉幕府と南の境界」・飯村均「中世のムラ」・柴佳世乃「読経道の成尋阿闍梨説話」・山口博之「板碑と木製塔婆」・中澤克昭「持明院基春考」など、さまざまな方法論を駆使する論者が集まり、『中世人の軌跡を歩く』が編まれる。以上を通読すると、学融合の現状を考えさせられる。戦後研究史は階級闘争を論じた時代から前世紀末に社会史へと転換し、学問の多様化を産んだ。そして網野善彦・石井進らが主導して学際的研究が目指され、学融合の時代に至った。裾野を広げる現状に対して、どのように現状を把握し、自らを方向付けするかは容易なことではない。その現状のなかで、本書は編者と編者のもとに集った人々が格闘した結果であり、方向性を模索した到達点に思えた。言い換えれば、学融合は継続し

て挑み続けるべき課題であるという、「宣言」とでも言い得るような主張であると。評者にはこのように感じられた。(齋藤慎一)